

〈研究ノート〉

実践的国際協力学—新疆での35年から

小島 康誉

1. 国際協力の一事例

世界は益々複雑化し対立があふれている。そこに国際協力の重要性があり、それにとまなう種々の課題を研究するのが国際協力学である。筆者はその研究者ではないが、実践者として記したのがこの小論である。

筆者は1982年6月以来、35年の間に中国・新疆ウイグル自治区(以下、新疆と略す)を150回以上訪問し、文部科学省・中国国家文物局(文化庁に相当)・新疆政府・新疆文化庁・新疆文物局・新疆档案局・新疆文物考古研究所・新疆大学・佛教大学はじめ日中双方の多くの方々のご指導ご協力をえて、世界的文化遺産保護研究・人材育成・日中間相互理解促進の三方面で100項目余の国際協力を実践してきた⁽¹⁾。改めて感謝を表したい。

世界的文化遺産保護研究事業：1986年キジル千仏洞を参観し「人類共通の文化遺産」と直感、保護をせねばと新疆文化庁へ個人寄付、87年各界の著名人を役員にいただき「日中友好キジル千仏洞修復保存協力会」(会長：上村晃史氏)を設立。殆ど知られていない石窟への募金に走り回り、88・89年に3,000を超える個人・企業の浄財1億500万円余を新疆文化庁へ寄贈し本格的修復保存工事を実施、千仏洞はよみがえった⁽²⁾。その後も文化財保護の重要性を訴求するために参観団を度々派遣、2010年には職員通勤用バスをキジルはじめクチャー帯の文化遺産を管理する亀茲研究院へ贈呈するなど協力してきた。

2014年キジル千仏洞は「シルクロード：長安—天山回廊の交易路網」構成遺産33遺跡のひとつとした世界文化遺産に登録された。2015・16年キジルおよび共に世界遺産となった新疆6遺跡の写真集『新疆世界文化遺産図

鑑』中国語版と日本語版(筆者・王衛東新疆文物局長編／新疆美術攝影出版社・日本僑報社)も出版した。2016年には新疆文物局・亀茲研究院により「小島康誉とキジル—小島氏新疆文化文物事業投身30周年記念座談会・資料展」が現地で開催された。講演では30年前の写真で修復前・修復工事・修復後を紹介、また職員飲料水は塩分が高く健康を阻害しているので飲料水浄化設備を寄贈した。

1988年から佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構と新疆文化庁・新疆文物局・新疆文物考古研究所が9次にわたる「日中共同ニヤ遺跡学術調査」(文部科学省助成・国家文物局批准)を敢行した。日本側からは佛教大学・龍谷大学・早稲田大学・国立民俗歴史博物館・京都大学・関西大学・関西外国語大学・科学技術庁・京都造形芸術大学・京都市埋蔵文化財研究所・国学院大学・六甲山麓遺跡調査会・奈良文化財研究所・大阪市文化財協会・橿原考古学研究所・長岡京市埋蔵文化財センター・古代オリエント博物館・大手前大学・ジェック・寺尾商会・ツルカメコーポレーション、中国側からは新疆政府・新疆文化庁・新疆文物局・新疆文物考古研究所・新疆博物館・国家文物局・北京大学・中国科学院・中国社会科学院・華東師範大学・中国文物研究所などの研究者・撮影技師・測量技師・通訳の参加を得た。和田文管所・ラクダ隊・石油探査隊・コックなどの支援も受けた。諸氏の尽力で広大な範囲(南北約25km・東西約7km・周辺ふくむ)を全面的分布調査・測量・発掘・撮影など総合調査を実施し、遺跡全容を解明、後に中国の「国宝中の国宝」に選ばれる「五星出東方利中国」錦なども発掘した⁽³⁾。

「1995年中国十大新発見」・「20世紀中国大発見100」にも選ばれた⁽⁴⁾。研究・シンポジウム開催・報告書刊行などは今なお継続している⁽⁵⁾。検出遺物の一部はNHK等「シルクロード絹と黄金の道展」(2002)・「新シルクロード幻の都楼蘭から永遠の都西安へ展」(2005)にも出陳された⁽⁶⁾。2014年中国や欧米のカラーシュティール研究者へ現地で調査状況を紹介。2015年には遺跡保護強化のため巡視用小型沙漠車を現地で寄贈した。ニヤ遺跡も前述「シルクロード」世界遺産当初計画に含まれていたが、規模を縮小して申請されたため次段階へ繰り越された⁽⁷⁾。追加申請にむけて中国

側により保護工事が進められている⁽⁸⁾。

2000年には中国歴史文化遺産保護網 www.wenbao.net を中国の友人と開設し経済急発展の一方で文化財破壊もすすむ中、文化財保護意識啓蒙に一定の役割を果たしている。

2001年から『近代外国探険家新疆考古档案史料』(新疆美術攝影出版社2001)や『清代新疆建置档案史料』(新疆美術攝影出版社2010)など歴史档案史料4冊を新疆档案馆と出版し研究者の研究に寄与してきた⁽⁹⁾。

2002年から佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構と新疆文物局・新疆文物考古研究所が4次にわたる「日中共同ダングアンウイリク遺跡学術調査」(国家文物局批准)を敢行した。日本側からは佛教大学・奈良女子大学・六甲山麓遺跡調査会・奈良大学・国士舘大学・飯田市美術博物館・岡墨光堂・アートブリザベーションサービス・六法美術、中国側からは新疆文物局・新疆文物考古研究所・北京大学・国家博物館・和田文物院・亀茲石窟研究所・東方石油公司などの研究者・測量技師・保護技術者・模写専門家の参加を得た。ラクダ隊・運転手・コックなどの支援も受けた。諸氏の尽力で全面的分布調査・測量・発掘・撮影など総合調査を実施し、遺跡全容を解明、焼損した法隆寺金堂壁画の源流の実物資料ともいえる屈鉄線で描かれた「西域のモナリザ」などを発掘、保護処理と模写も行った⁽¹⁰⁾。

2004年調査にはNHKと中国中央TVが同行取材し翌年放映された。検出遺物の一部はNHK等「新シルクロード幻の都楼蘭から永遠の都西安へ展」(2005)にも出陳された⁽¹¹⁾。研究・シンポジウム開催・報告書刊行などは継続している⁽¹²⁾。

人材育成事業：1986年新疆大学に設立した「小島奨学金」は計4,500人におよび、受賞者は塔西甫拉提・特依拜学長(東京理科大学工学博士)や多くの教授陣はじめ各界で活躍している⁽¹³⁾。授与式にはほぼ毎年出席し、挨拶は世界を意識してもらうため「自分のため、新疆のため、中国のため、そして世界のために、努力、努力、さらに努力を！」と締めくくっている。現在の契約は2020年迄である。新疆大学で最古・最長の奨学金である。

1998年から「日中友好希望小学校」5校舎を新疆政府外事弁公室・新疆

教育委員会と建設した⁽¹⁴⁾。多民族地区であるので、漢・ウイグル・回・カザフ・モンゴル族と民族を考慮した。

1999年新疆政府外事弁公室・新疆文化庁・新疆文物局と設立した「小島新疆文化文物事業優秀賞」は日中関係悪化の影響で2年間中断したが、2016年には5年間延長・増額協議書に調印、累計325人・組織に授与し鼓舞している⁽¹⁵⁾。

1999年にウルムチ市政府外事弁公室と設立した「シルクロード児童就学育英金」は計1,600人に育英金などを提供した⁽¹⁶⁾。

相互理解促進事業：1982年ウルムチ仏教協会への寄付に始まり、和田&民豊&策勒博物館建設・南疆水利改善プロジェクト・ウルムチ&和田福祉施設備品・新疆文物考古研究所エレベーター・小学生学用品&寄宿舎備品・農業用井戸掘削・小学校修理・街路灯設置などの費用を提供し、その都度現地へ赴き国際協力の意義を訴えた⁽¹⁷⁾。

1988年から政治・行政・文化・経済など各方面の代表団多数を派遣している⁽¹⁸⁾。

1989年から新疆政府・新疆大学・新疆師範大学・新疆財経大学・新疆医科大学・石河子大学・北京大学・清華大学・同済大学・天津美術学院・大連大学……および日本各地での相互理解促進講演、新疆紹介の各種書籍出版や写真展を行っている⁽¹⁹⁾。

1990年から経済・教育・メディア各方面からの要請に応じて各種仲介を行っている⁽²⁰⁾。違法測量で拘束された国立大学・国立研究所の教授らのお詫び仲介も行った⁽²¹⁾。

1993年から何かと誤解されている日本への理解促進のため新疆の政治・行政・文化・経済・教育など多方面の代表団多数を招聘し大きな成果をあげている⁽²²⁾。

20周年・30周年記念大会：上述のような国際協力に対して、新疆政府は2001年「小島康誉氏新疆来訪20周年記念大会」、2011年には「小島康誉氏新疆来訪30周年記念大会」を開催。それらの一環で自治区トップとの会

見・記念歓迎宴・記念写真展・記念座談会が行われ、記念誌として『外国友人中国情—小島康誉与新疆』(劉宇生新疆政府外事弁公室副主任等編・新疆人民出版社2001)、『大愛無疆—小島精神与新疆30年』(韓子勇新疆文化庁書記編・新疆美術攝影出版社2011)も出版された⁽²³⁾。当方は記念感謝宴で応じた。

国際協力の模範：佛教大学・新疆文物局・北京大学・中国社会科学院が2009年北京大学で開催した「漢唐西域考古—ニヤ・ダンドンウイリク国際シンポジウム」に対して、国家文物局機関紙「中国文物報」(2010.03.19)は1頁特集を組み、「中国外国協力と学問分野交流の模範例」・「中国外国共同努力の傑作」・「多領域で西域考古の研究保護協力を実施」・「壁画保護と研究」・「紡織品研究と保護」・「文書解説」・「新疆大遺跡保護と探索」の見出しと写真多数で大々的に報じた。

中国で、このように外国人まして日本人との国際協力が高く評価されるのは例外的であり、上述のような日本人対象の顕彰活動が開催されることはきわめて稀である。

2. 国際協力学とは

国境を越えて、政府・各種団体・企業・個人などによって行われる支援・貢献活動が国際協力である。国際協力は相手国のみならず自国の国力を高め、国益に直結する活動であり、相互理解を通じて平和を維持し戦争を抑止し、人類の安寧に寄与する活動である。

困っている人を助けたいと思い行動するのは人間として自然のことであり、人類誕生以来培われてきた「慈愛」の現れである。19世紀の赤十字活動などから順次広がり、20世紀中頃より本格化し始めた。それらを総合的に研究するのが国際協力学である。

我が国は国際協力でも先進国である。政府開発援助(ODA)といった資金面ばかりでなく、国際協力機構(JICA)や国際協力銀行・青年海外協力隊・シニア海外ボランティアなど組織や制度も整っている。また多くの非政府組織(NGO)や企業・団体・個人が活動していることは特筆すべきで

ある。

国際協力学は目新しい分野であるので、幾つかの参考文献から紹介してみる。

高木保興編『国際協力学』では国際協力学を次のように定義し、その確立の必要性と国際協力領域の拡大を記している。

国際協力学は、地球温暖化、公正で安定した貿易、テロの抑止など一国の政府だけでは対処出来ない問題に、諸外国の政府はもちろんのこと、NGO や市民が力を合わせて取り組む手だてを体系的に考察する新しい研究領域である。そこには、人々が協力せずに対立してしまう理由の考察も含まれる。世界への積極的な関与がこれまで以上に求められている中で、日本における国際協力学の確立は急務である。そして、SARS や鶏インフルエンザに象徴的に見られるように、グローバル化が進行する中で国際協力を必要とする領域はますます拡大している⁽²⁴⁾。

同書の章立てから国際協力学のテーマを読み取ることができる。羅列すれば、「国際協力の視点・アフター情報の把握と行動予測・グローバル社会の安定と持続・共同体形成と環境安全保障・民間ベースの国際協力・国際協力が生み出す新たな問題」である⁽²⁵⁾。

同書では個人の国際協力について、NGO の部分でカバーされるとして、次のように記している。

退職金の一部を寄付して途上国に小学校を建設する人もいる。これも国際協力であるが、本書では、紙幅の制限から、個人の国際協力はNGO の議論でカバーされる部分が多いと判断し個別の節は設けていない。別の機会をまちたい⁽²⁶⁾。

また下村恭民ほか『国際協力—その新しい潮流』では我が国での国際協力への意識変化について次のように記している。

日本の社会は、新しい貧困、雇用の不安、格差の拡大、高齢化の進展、財政の悪化、政治の不安定など、緊急で重い課題が満ちているが、その一方で、ここ数年、「地球社会にどのように貢献するか」というテーマの論議が復活し、新聞の社説でも「ODA 予算の増加を」という主張が戻ってきた。国民の意識にも変化が起きており、内閣府が毎年実施する「外交に関する世論調査」では、低下を続けていた「経済協力を積極的に進めるべきだ」の回答に回復のきざしが見られる。われわれの日常生活を重い不安が覆う現状を考えると、意外とも言える変化である。このように、国際協力を取り巻く日本国内の状況は、決して単純ではない。それだけに、国際協力について改めて考え直す地道な営みの重要性は、さらに高まっていると考える⁽²⁷⁾。

同書の章立てから国際協力の潮流を羅列すれば、「国際協力ということ・国際協力の基本的な仕組み・途上国支援アプローチの変化・21世紀の新しい潮流・貧困削減への取組み・平和構築と復興支援・持続可能な開発への取組み・途上国のオーナーシップとガバナンス重視の潮流・グローバルガバナンス・国際資金還流の変化と民間資本の役割・市民社会に期待される役割・日本の国際協力」である⁽²⁸⁾。

同書では個人の国際協力について、NGO について述べる中で、「市民社会」を主語として「……ではないか」と次のように記している。

市民社会による国際協力は、現在よりももっと広がりや深みを持つてのではないか。「市民社会による国際協力」が、不条理な国際システムの影響を受けやすい「政府による国際協力」をよりいっそう望ましい方向に導けるのではないか。市民社会同士の交流があってこそ、各国の内発的なガバナンスの発展を理解し支援できるはずではなからうか。途上国国民が、それぞれの希求する未来を一日も早く実現しようとする努力に対し、真に寄りそえるのは「普通の市民の目」ではないか⁽²⁹⁾。

さらに内海成治編『国際協力論を学ぶ人のために』には最重要課題は貧困撲滅と紛争解決であり、そこに国際協力の必要性があると次のように記している。

21世紀の人類の課題はたくさんあるが、そのなかでも貧困と紛争は最も重要なものである。貧困撲滅と紛争の予防や解決への取組みにとって、国際協力は必須の活動である。同時に、こうした課題の広がりや深化に対応して国際協力のあり方も大きく変化している。これは世界的な現象であるが、G8のひとつとして、またODA 大国として、日本が国際協力に与える影響は大きい。アフガニスタンやイラクへの支援における政府やNGOの活動は、これまでの日本の国際協力とは随分変わってきている。21世紀の日本にとって、国際協力は不可欠であると同時に、変わっていくことが必要である⁽³⁰⁾。

同書の章立てから国際協力のしくみと動向などを羅列すれば、「国際協力とは何か・JICAと技術協力・国際協力銀行と資金協力・青年海外協力隊・国際機関の役割と動向(世界銀行・アジア開発銀行)・NGOの役割と動向・貧困問題・環境問題・ジェンダーと開発・教育開発・保険医療・人口問題とリプロダクティブヘルス国際協力の評価・平和構築と良い統治・援助協調への対応・多言語多文化に配慮した国際協力」である⁽³¹⁾。

同書にも個人の国際協力についての記述はないが、青年海外協力隊の章で「海外ボランティア」として次のように記している。

何日間か体験旅行的に滞在するのではなく、その地域社会の一員として働き、生活するのである。いつもいい顔ばかりしているわけにはいかない。活動上の衝突もあるだろうし、感情的な行き違いも当然あるだろう。そうした喜怒哀楽すべてをさらけ出した2年(派遣期間)の歳月は、彼らボランティアと受け入れ社会の普通の人々との間に、抽象概念ではなく、具体的実体を伴った相互理解を生むであろう⁽³²⁾。

そして山本敏晴『国際協力をやってみませんか?』には、「有給のプロ国際協力師」になる道が提案され、「インターネットで情報を収集する。英語力アップと国際協力の実際把握を学生時代に行う。社会人経験と海外勤務と修士が大学卒業後の道。プロの国際協力師活躍の場は国際機関(国連・世界銀行・IMF など)・政府機関(JICA・青年海外協力隊など)・民間組織(NGO・NPO・開発コンサルタント企業など)」と記されている⁽³³⁾。

国際協力学系を設置している大学院も順次増えている。煩雑ながら国公立・私立順に一部を列記する。宇都宮大学(国際学研究科)・筑波大学(国際公共政策専攻)・東京大学(国際協力学専攻)・名古屋大学(国際開発研究科)・神戸大学(国際協力研究科)・広島大学(国際協力研究科)・静岡県立大学(国際関係学研究科)・広島市立大学(国際学研究科)・山口県立大学(国際文化学研究科)・国際大学(国際関係学研究科)・桜美林大学(国際学研究科)・杏林大学(国際協力研究科)・恵泉女学園大学(平和学研究科)・国士舘大学(グローバルアジア研究科)・上智大学(グローバル・スタディーズ研究科)・拓殖大学(国際協力学研究科)・東洋英和女学院大学(国際協力研究科)・東洋大学(国際地域学研究科)・立教大学(21世紀社会デザイン研究科)・早稲田大学(アジア太平洋研究科)・文教大学(国際学研究科)・日本大学(国際関係研究科)・愛知大学(国際コミュニケーション研究科)・中部大学(国際人間学研究科)・日本福祉大学(国際社会開発研究科)・大阪学院大学(国際学研究科)・同志社大学(グローバル・スタディーズ研究科)・立命館大学(国際関係研究科)・龍谷大学(国際文化学研究科)・吉備国際大学(連合国際協力研究科)・名桜大学(国際文化研究科)などである⁽³⁴⁾。なお、東京外国語大学大学院には総合国際学研究科国際協力専攻平和構築・紛争予防専修コースがあり「紛争予防学」を提唱している。

前述のように国際協力も変化しており、NGOがODA資金を使ってより大きな活動を実施する時代となった。例えば2016年「公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」のミャンマーでの「カチン州における地域に根ざした母子保健システム強化支援事業」に9,300万円余、「特定非営

利活動法人 AMDA 社会開発機構」のネパールでの「ダティン郡におけるコミュニティ建設技師養成事業」に3,700万円余の ODA 資金が提供された(外務省「日本 NGO 連携無償資金協力」電子版)。

それらは大規模展開できる意味で「ODANGO = お団子」と称される一方で、取り込まれ批判ができなくなる意味で「DANGO = 談合」と揶揄されてもいる。

島国・海洋国である日本にとって国際協力は国家の存続と繁栄のために不可欠である。しかし、内向きになりつつあるといわれる国民から広く支持されているとは必ずしも言えない。国民の生活が国家の繁栄と存続により支えられているといった「常識」が「平和ボケ」しているとも譬えられる人々から欠落しているからであろう。

ODA には巨額税金が投入されている。発展途上国では大いに役立っている一方で、世界第二の経済大国となった中国への援助はもう中止すべきとの意見もある。当然ながら、その内容は時代の変化に応じて進化してゆくべきである。国際協力に限界があるのは当然であるが、一定の役割を果たしているのは厳然たる事実である。

日本の「奇跡の戦後復興」には諸外国からの援助も大きな役割を果たしている。例えば、終戦後の1946年から5年間、アメリカの「占領地域救済政府資金」・「占領地域経済復興資金」から約50億ドルの ODA を受けた。またカナダ・メキシコ・チリ・ブラジル・アルゼンチン・ペルーなどからも食料や生活物資の援助を受けた。1953年に世界銀行からの借款を得て、東海道新幹線・東名高速道路・黒部第四発電所などを建設した。

復興を遂げた日本は被援助国から援助国となり、ODA は1954年よりアジア諸国への戦後賠償と並行して開始された。援助国は東アジア(フィリピン・ミャンマー・インドネシア・ベトナム・モンゴル・中国・韓国ほか)はじめ南アジア(パキスタン・インド・ネパール・ブータン・スリランカほか)、中央アジア(カザフスタン・キルギス・ウズベキスタン・タジクスタンほか)、中東北アフリカ(アフガニスタン・イラン・イラク・シリア・トルコ・エジプト・リビアほか)、アフリカ(エチオピア・コンゴ・スーダン・ケニア・タンザニアほか)、中南米(ブラジル・キューバ・コス

タリカ・ペルー・チリほか)、欧州(ブルガリア・ルーマニア・ハンガリー・ポーランドほか)とほぼ全世界に及んでいる(外務省「ODA 国別データブック」電子版)。1989年から10年余は世界一の援助実績であったが、厳しい財政状況で大きく見直され、2015年に「ODA 大綱」はその名も「開発協力大綱」へ変更された。

ちなみに中国への ODA は文化大革命の混乱期を脱し、改革開放政策に転じたことを契機として1979年に開始され、2013年度までの有償資金協力(円借款)は約 3 兆3,164億円、無償資金協力は約1,572億円、技術協力は約1,817億円、計約 3 兆6,553億円に上っている(外務省「対中 ODA 概要」電子版)。これらは北京空港(300億円)・上海空港(400億円)・北京～秦皇島間鉄道拡充(870億円)・天生橋水力発電(1,180億円)・青島港拡充(597億円)・内蒙古化学肥料工場(269億円)などに使用された(外務省「対中 ODA 実績概要」電子版)。円借款と無償資金協力は終了し、技術協力は継続されている。

新疆への ODA は「新疆ウイグル自治区医療水準向上計画」への11億5,800万円などのほかに、小学校建設・中学校食堂建設・医療機材整備・病院建設などへ2002年以降2013年迄に21件の無償資金協力が贈呈されている(外務省「ODA 案件検索」電子版)。上記には布尔津県(県は日本の市に相当)の日中友好小学校再建計画(2002)、吉木乃県医療機材整備計画(2006)も含まれているが、2005年に筆者は友人らと布尔津県のホムカナス郷小学校へ新しい校舎や児童用イスなど、吉木乃県のイラジュハイ郷小学校へ新しい校舎や学用品を贈呈した。

3. 国際協力実践10カ条

政治体制をはじめとして、民族・言語・思想・文化も大きく異なり、反日感情も収まらない中国で、しかも種々の事件が度々報道される多民族地区新疆で、ここまで成しえたことは自分でも信じられないほどである。日中双方多くの方々のおかげであり感謝しきれない。なお新疆ウイグル自治区はその名が示すようにウイグル族が半数近くを占めているが、その宗教

はイスラーム教である。筆者は仏教浄土宗の僧侶でもあり、剃髪頭と法衣から一定の違和感を持たれたことは度々であるが、宗教活動を実施しているわけではないので、この面で活動を遮られたことはなかった。

国際協力活動が外交官や政治家たちだけの役割(それは報酬をえての仕事であり当然のこと)と捉えられ、あるいは NGO といった団体活動は認知されているものの、個人段階での国際協力はまだまだ少なく、前述した如く「個人の国際協力は NGO の議論でカバーされる部分が多いと判断し個別の節は設けていない」と記される状況である。あるいは日本では公共外交といった考え方は十分には認識されていない。

そのような中で、筆者が心がけてきた国際協力実践10カ条は下記である。

① 使命感をもつ

あまりにも当然のことであるが、何のために国際協力するのかを明確に自覚する必要がある。あらゆる分野で異なる外国での国際活動では大小様々な衝突がある。そのような際に双方が立ち戻る原点が使命感である。基本理念の明確化である。意義・目的・目標を明確にすべきである。当然ながら先方にも同様の意識が必要である。

例えば、キジル千仏洞修復保存事業では「人類共通の文化遺産を後世へ」を掲げ日中双方が活動してきた。また永年にわたり展開し大きな成果をあげたニヤ・ダンドンウイリク両遺跡調査では「友好・共同・安全・高質・節約」の五大精神を掲げた。安全は沙漠活動ならではのスローガンである。沙漠活動は危険がともなう、死に至った例もある。

日中共同隊も緊急露営、砂嵐、ラクダからの落下による脳震盪や骨折、病人発生、車両火災といった突発事故を度々経験している。普段は各自の判断で行動していても緊急時はリーダー(隊長)の指揮に従う命令系統の厳守が安全確保の基本である。「非日常活動」であるとの認識不足の隊員には筆者(日本側隊長)や中国側隊長の指示に従わず、ハメを外したり、危険を招いた人もいた。が、それもリーダーの責任と捉えてきた。

各種人材育成や相互理解促進事業では「大愛無疆」(大きな愛に境界は無い)を双方が意識した。

日中両国間の各種会議などでは「戦略的互惠関係」・「WIN-WIN の関係」と繰り返し発言されている。また「日中友好」が度々叫ばれている。この言葉が頻繁に登場するのはそれが形骸化しているからでもある。「日中友好」を基礎として、第二段階「日中相互理解」、第三段階「日中共同」を掲げる時期である。

② 国益意識をもつ

外国との協力事業が国際協力である。国際協力は相手国のみならず自国の国益に資する活動でもある。それぞれの国家にはそれぞれの立場があり、それぞれの国益がある。

一例をあげれば、筆者は2016年9月、新疆文物局・亀茲研究院共催「小島康誉とキジル—小島氏新疆文化文物事業投身30周年記念活動」に招かれた際、クチャホテルのロビーに置かれた地球儀を何気なく見た。そこには「釣魚島」と「赤尾嶼」(尖閣諸島の魚釣島と大正島の中国呼称)が描かれていた。1 mほどにすぎない地球儀である。中国の沿岸にも小さな島々が多数所在するが、それらは描かれていない。またウルムチの新疆博物館に展示されていた唐の勢力範囲を示す概念図には南シナ海を囲む「九段線」が描かれていた。これらは中国の徹底した国益主義の表れである。

双方がそれぞれの主張を展開、国益を重視するのは当然のことであるが、それは対立の原因にもなりうる。地球儀の例でいえば、それらを撮影したがあえて論議を挑むことはしない。同行していた新疆文物局幹部らも撮影する筆者をニヤッと笑って見ているだけである。双方が立場の違いがあると認識しているからであるが、双方が国益を忘れることもない。

筆者は日本を代表して国際協力をしているわけでも、官僚でもなく一市民であるが、我が国の国益を忘れたことはない。中国人から「中国が好きな日本人は多いが、中国一辺倒の日本人は妙だと思ふ。貴方は親中派だが意見をハッキリ言うので長く付き合っている」と言われたこともある。

30余年にわたる国際協力が彼らの対日理解を僅かでも促進したとすれば、それが最大の国益への寄与であろう。中国各地いや世界各地で貢献つづけている方々も多い。真の外交官といえよう。

③ 握手する

外交力の基本は相手国の主権・法規・文化の相互尊重である。反対意見があっても、まずは握手して聞くように心がけた。握手とは相手を尊重することである。我が国での礼に相当するといえよう。握手にも温度差がある。熱烈な握手から早く帰れ、までを体験している。

握手するとは「笑う」とも表現できる。微笑んで近づき「お元気ですか」、「お忙しいでしょう」、「今日も話し合いましょう」などと語りかけながら握手してきた。苦虫をかみ殺したような顔での握手では「握手」とはいえない。まるで「お前なんかには会いたくないが仕方なく会ってやる」といった握手では協力関係は築けない。そんな態度の相手に対しては力強く握り返し、当方の熱意を伝えるように心がけた。

握手の対極に位置するのは会わないことである。長年にわたって国際協力を続けていると会いたくない相手もいる。論争を仕掛けられ、小突かれたことさえある。そんな相手にも会うようにした。相手側から打合せを断られた事もある。そんな時には電話やFAXで一層熱意をこめて考えを伝えた。関係者がいる場合は趣旨を伝えてくれるよう依頼した。放り出したままでは漸進しない。

「今、東京にいる。会いたい。明日帰る」と突然の電話。中国特色のひとつである。当方にも予定があり困ってしまったことも度々。極力対応した。当方が訪中する際は、概ね1ヵ月前には政府外事弁公室を通して、各機関へ訪問用件を連絡した。

小突かれた相手に20数年ぶりに北京で会った。「あの頃は国際協力の意味がよく分かっていなかった。ヨーロッパへ講演に出かけ、やっと分かった。協力できることなら何でもする」と熱い握手を求められた。

④ 主張する

先方の主張を聞いたのちに、主張すべきは大いに主張した。その場合も相手の感情の機微をとらえるよう努めた。相手の発言をメモし、趣旨を分析し同意できる事項から回答し、同意できない事項は婉曲的であっても明確にその旨を伝え、対案を主張した。日本側が数名いる場合は、諸氏にそ

それぞれの考えを述べて頂いた。

同意をえるには納得してもらうことが必要である。力づくで押さえ込んだのでは長続きしない。例えば、協力するのだから、資金提供するのだからといった態度では一時的関係しかできない。

世界には偽ニュースが大量に出回っている。主張は事実即して行った。事実を捻じ曲げての発言で主張を通すことは出来てもいつかは剥げ落ちる。長期的には通用せず、事実即した主張を展開すべきであろう。情報を鵜呑みにすることなく慎重を期し対応した。

相手側および当方の主張を記録として残すことが重要である。重要事項は議事録を作成しサインを得た。準重要事項はメモを渡すなり、帰国後にFAXを送信し記録として残した。活動終了後には概要をまとめた。よって活動記録は膨大である。殆どの活動で協議書を交わした。合意を明確にするとともに後日の対立にそなえるためでもある。

研究者やメディアなどが許可も得ず、調査研究や撮影している例を度々見聞きする。あるいは楼蘭やニヤ・ダンダンウイリクなどへ無断進入する研究者や観光客もいる。前述した違法測量で拘束された国立大学・国立研究所の教授らは「相手側中国人が許可を取っていると思っていた」などと主張している⁽³⁵⁾。しかし結果的に当人のみならず所属機関そして日本の評判を落とすことになる⁽³⁶⁾。また研究成果や撮影資料を持ち出すだけの一方的行為では、20世紀初頭の文化財持ち出しと大差ない。

国際活動では契約を交わし、先方のしかるべき機関の許可を取得し、その確認が必須条件である。相手方研究者が許可証を取得したならば確認し

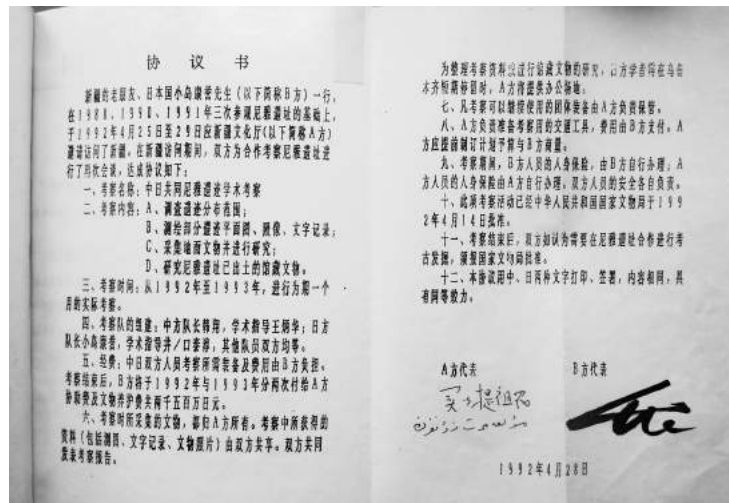


図1 日中共同ニヤ遺跡学術調査1992・93年分協議書 (1992年4月28日付)

コピーを保存すべきである。

筆者は前述のような国際協力活動で(単なる寄付を除いて)文書による正式許可を取得した。例えば日中共同ニヤ遺跡学術調査では国家文物局の発掘許可書を取得した。これは外国人では筆者のみといわれている。調印や打合せの写真も極力残した。非文字資料である写真も文字資料と同様に重要である。双方主張の裏づけとなる。

共産党による一党独裁の中国では、指導者の支持と指示が重要である。積極的に指導者と会見した。会見では先方発言に続いて、当方が会見への感謝・活動報告・計画を発言。事前にイメージトレーニングを行い、メロは一切見ない。聞くことはほぼ分かるので通訳なし、話すときは正確を期すために通訳を通した。指導者には筆者のこれまでの活動からほぼ100%支持発言で応じて頂ける。会見には党委員会常務委員、外事弁公室書記

or 主任、文化庁書記 or 庁長、新疆大学書記 or 学長、档案局長、文物局長らが同席するので指導者の当方主張への支持発言効果は大きい。TV 各局や新聞各紙でも報道され、指導者の支持が一般の人たちにも広く認識される。おのずと活動しやすくなる。



図2 中国政府国家文物局のニヤ遺跡発掘許可証 (1994年1月29日付)

⑤ 理解する

世界には約200の国家があり、それ以上の民族がいる。それぞれの歴史・体制・制度・文化・言語などは異なる。当然その立場は異なる。双方が理解しあうことは難しい。理解しようと

努力することが重要である。

厳戒態勢つづく中国ではホテルや大型商店などには保安検査装置が設置されている。係員は「警察 POLICE」と表示された防弾チョッキを着用しているが、その人たちは「警官」ではない。あるいは2016年9月新疆滞在中の新疆文化庁の歓迎宴、お決まりの乾杯がない。前日の別席ではあったのに。「今日から公式活動での酒類は禁止になった」と文化庁の庁長。

また天津の友人「最近では家庭で共産党委員会を開くことが推奨されている。開く人もいるらしい」と。このように理解しがたいことはそのまま「理解」するようにしている。

理解しあうための重要手段が「同働・同食・同眠」であろう。炎天下の大沙漠で、筆者は彼らと一緒に発掘。誰よりも早く起床し火をおこし、コックが朝食の準備にかかれるようにした。街では同じ部屋で沙漠では同じテントで寝た。会食は経費もかかるしある意味では疲れる活動であるが、積極的に機会を持った。

同働・同食時には笑いを提供した。一党独裁体制でなにかとプレッシャーの多い彼らにとって硬い話は喜ばれない。

土産にも気を配り、相手が喜び安くて軽いものを選び理解を促進した。例えば、新疆政府主催の筆者訪問30周年記念活動時の感謝宴では「大愛無疆」とサインした広重の「赤富士」扇子150本。そして日本側諸氏による「大漁節」踊り。新疆大学主催の奨学金30周年記念活動時は自作漢詩。佛教大学宗教文化ミュージアムで開催したシンポジウムの感謝宴ワインは「NIYA」、日中共同隊がニヤ遺跡で「五星出東方利中国」錦を発掘しニヤが有名となり、ワインの名前にまでなったものである。中国側5名・日本側隊員諸氏・中井真孝佛教教育学園理事長・福原隆善前佛教大学学長・山極伸之佛教大学学長・安田暎胤薬師寺長老(役職はいずれも当時)ら出席者約50人に楽しんでいただいた。

⑥ 計画する

PLAN・DO・CHECK は基本中の基本。長期・中期・短期計画を作成

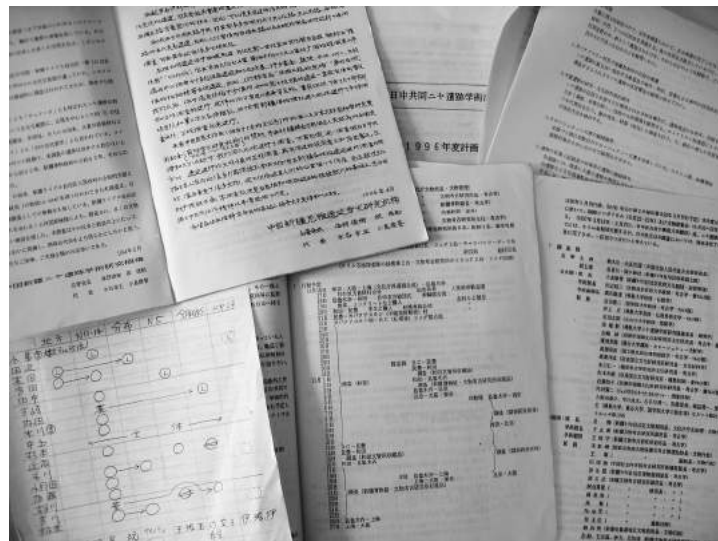


図3 日中共同ニヤ遺跡学術調査1994~96年各種計画書

し臨んだ。日本側隊員はもちろんのこと中国側へも配布した。とは言っても突然変更が日常茶飯事の彼らには「柔らかい頭で」で応じた。

公開も計画づくりに組み込んでおくべき一部である。活動のすべての段階は公開されなければならない。情報公開の原則であり、中でもその成果は極力早く広く公開する必要がある。簡報・報告書・シンポジウム・写真集・文物展示・プレスリリースなどさまざまな手法が考えられ、我々も実行してきた。

インターネット時代となりウェブ発信も重要となっている。従来、ウェブ発信は印刷物発信より軽視される傾向にあったが、今後は瞬時化と国際化に対応できる利点から逆転するとも思われるので、筆者が実践してきた一連の国際協力でも強化したい。その一環として「シルクロード国献男子30年」と題して、一連の国際協力を写真とともに分かりやすく「ADC文化通信」ウェブ上で紹介し、一定の好評をえている。

また国際化への対応では英語での発信も重要となる。修復保護協力開始28年後に世界遺産となったキジル千仏洞活動をふくむ拙著『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』（佛教大学宗教文化ミュージアム2013）を一部修正・後発事項を加筆、英訳し、調査隊員の玉稿をえた『Kizil, Niya and Dandanoilik』（東方出版2016）はそのような考えに基づ



図4 キジル千仏洞・ニヤ遺跡・ダンダンウイリク遺跡に関する1987～2016年各種報告書・発表要旨など



図5 多くの人々が協力しあって(ニヤ遺跡調査1993年隊・部分・撮影:中国側隊員)

く英文での出版である。国内外で販売されている。

⑦ 組織する

日中共同でのニヤ遺跡・ダندانウイリク遺跡の大規模調査、ダندانウイリク遺跡検出壁画保護では、遺跡や壁画の重要性にふさわしい高レベルの研究者・撮影技師・測量技師・保護技術者・模写専門家を前述したように組織した。諸氏とも超多忙にも関わらず遠く離れた新疆での長期間活動に参加いただいた。さらには大部の報告書作成に膨大な時間を費やしていただいた。各位のご尽力に心からの感謝を改めて表したい。

組織づくりに欠かせないのが資金調達である。大規模活動には大金を必要とする。例えば約60人が沙漠で3週間にわたる調査・報告書刊行・シンポジウムや文物展開催・人材育成や相互理解促進事業と多額に上った⁽³⁷⁾。個人での国際協力が普及しない最大の要因はこの資金手当てであろう。

⑧ 我慢する

外国とは異国である。立場が異なるのは当然のことである。一例をあげよう。先に紹介した文化・文化財分野の人材を育成する一環としての「小島新疆文化文物事業優秀賞」は2013年が契約期限であった。その前年に延長を提案した。その後の2012年9月、尖閣諸島が国有化され、日中関係はいっきに冷え込んだ。中国100以上の都市で激しい反日デモが繰り広げら

れた。日系企業は焼き討ちにもあった。筆者が展開している協力事業にも各種影響が出た。本賞延長問題も同意はえられず、やむなく第15回で終了した。事態が好転すればまた復活の機会も来るだろうと我慢した。2016年、キジル千仏洞保存の重要性などを広報するTV番組打合せのため招聘した新疆文物局長から延長提案があり、当方はもとより異存なく同意、9月訪問した際、延長・増額協議書に調印し、第16回を授与した⁽³⁸⁾。

2014年11月、安倍晋三首相が習近平国家主席と会見しそれに続く日中関係好転の兆しを受けてである。しかし、双方ともこの事には一切ふれずに延長・増額協議書の文案を折衝した。それが国際交渉である。

国際協力は外国が主舞台であるからには、先方の意向を重視する必要がある。日本流だけでは進まない。今日にも回答があつてしかるべき事柄も数日あるいは数週間を要する。我慢に我慢を重ねたうえで催促するようにした。その場合も相手の立場(中国式表現でいえば面子)を考慮し、催促文案は数回推敲した。例えば「貴方から意見があれば連絡するように、と言われたから」と前置きし、本文をつづけ、「以上、参考までに」と締めくくった。

我慢は沙漠での大規模調査での必須能力でもある。陽が昇るころ起き(時に零下15度に)前夜の残りの羊丼やお粥を掻き込み、班ごとに徒歩やラクダで現場へ向かい、分布調査や測量・発掘・研究、炎天下(時に40数度に)で硬いナンとソーセージ・リンゴをわずかな水で流しこみ、一休みして夕方まで活動継続、夕食はまた羊丼か羊ラーメン、その後に打合せと実測・資料整理といった日々。狭いテントでの雑魚寝、風呂もシャワーもない約3週間……。満天の星をながめつつ、テントに入らず寝るといった「楽しい」こともあるが、強靱な精神力・体力と協調力がないと耐えられない。

⑨ 継続する

筆者がシルクロード新疆で国際協力を開始して早くも30余年、よくぞもったものと振り返っている。中国が独特の国であることは度々報じられている。投げ出したくなる事も多々あった。その度ごとに「大愛無疆」精



図6 農業用井戸掘削 (バイラ村にて撮影：楊新才氏2015)

神で継続した。『新疆世界文化遺産図鑑』日本語版(日本僑報社2016)の序で段躍中氏は「毛沢東主席は次のように述べた。一人の人間が一回良いことをすることは難しくない。難しいのは一生続けることだ」と記しているが、まさにそうであろう。実践が実績を生み、継続が信頼に結びつく。

継続のため注意してきたことのひとつに特殊な関係にならないことがある。ともすれば複雑で面倒な国際協力、社会通念を超えた土産などを提供したりすればスムーズに進行することもある。しかしそれは一時的な関係にすぎない。筆者が新疆で活動したこの35年間にトップの中国共産党新疆ウイグル自治区委員会書記は王恩茂、宋漢良、王樂泉、張春賢、陳全国各氏へ五代、新疆政府主席も鉄木尔・達瓦買提、阿不来提・阿不都熱西提、司馬義・鉄力瓦尔地、努尔・白克力、雪克来提・扎克尔各氏へ五代の代替わりがあった。外事弁公室や文化庁・文物局・文物考古研究所・档案局・新疆大学・ウルムチ市政府なども同様である。このように人が交代しても友情に近いかたちで国際協力を継続できたのは、決してその場限りの「裏交渉」をしなかったからであり、「特殊な関係」にならなかったからである。もしそうになっていたら人事異動したのちその機関との関係は断絶していたことであろう。

⑩ 感謝する

国際協力も極言すれば「人間力」が決め手であろう。相手との縁をありがたく頂き、相手への感謝をもち、義理と人情で接し、口や頭だけでなく心で行動するように努めた。科学技術がいかに発展しよう（例えばAI・自動運転・バイオ技術……）人と人の信頼こそが国際協力の決め手である。

外国との事業は思うようにいかないことばかりである。利益がともなう経済活動であれば双方が利益という明確な目標で協調しやすいが、金銭的利益がともなわない文化活動では継続は難しい。一過性の貢献は多数見ているが、続かないのは遭遇する各種困難を乗り越えられないからである。

引退した人たちとも交流を続けている。数年前の新疆政府主催の筆者訪問30周年記念活動時の感謝宴には退職者多数も招いた。新疆生産建設兵団



図7 幼稚園修繕（カイトナムジャイ村にて撮影：楊新才氏2015）

司令・新疆政府副主席・党宣伝部長・新疆文化庁書記・新疆大学学長・新疆政府幹部などを務めた諸氏である。在職中はその重責により影響力をふるった方々も退職し10年20年経ち、誰も訪ねて来なくなっている。「散歩して、テレビ見て、小説読んでいるだけだ。よく招いてくれた」と。ハグして友情に感謝しあった。2016年9月も20年前に新疆文化庁文物処長を定年退官した82歳の老人を見舞い昔話をひとつとき楽しんだ。キジル千仏洞へ

の個人寄付時の相手方である。

4. 国際協力を使命として

日本と中国の力関係は大きく変化している。中国は巨大化し、超大国アメリカの陰りもあり、あらゆる面で海外進出を強化している。アメリカ大統領がポスト・トゥルース・ポリテックス手法(「虚偽」での世論誘導)を乱発、今後修正必至のドナルド・トランプ氏へ交代し、中国の存在感はいよいよ強まるものと予測される。また世界がポピュリズム化する中、直接選挙のない中国では強力な戦略を展開しやすい。一方の日本は「劇場型」選挙の影響もあり国論定まらず混濁がつづいているが、ようやく海外発信を強化し始めた。国家繁栄の重要戦略のひとつが国際協力である。

国際関係は「正義」や「善悪」だけで動いているのではなく、「力」で動いている。外交とは握手しながら主張することであり、「したたかさ」が必要である。対立しつつ協調することである。

メディアも人々も相手国の悪い点のみに注目するだけでなく、優れた点にも目を向けるべきである。自国にいて相手国を批判するだけでは何も進まない。

尖閣諸島国有化で激減した中国人観光客は年間499万人(2015年・日本政府観光局 JNTO 電子版)と急増している。ゴールデンルートとされる東京・京都・大阪のみならず、それほど有名でない地方観光地にもあふれている。一方で訪中する日本人は249万人(2015年・中国政府旅遊局電子版)と中国内の諸事件の影響もあり減少したままである。以前は新疆のウルムチやトルファンではほぼ毎回出会ったが、昨今は珍しい。もっとも両国人口比からすれば訪中邦人は訪日中国人の5倍余ともいえる。

The Genron NPO and International Publishing Group による両国民の相手国印象調査(2016)では、日本人の中国への「良くない、どちらかといえば良くない」が2006年の36.4%から2016年には91.6%に上昇、逆に「良い、どちらかといえば良い」は2007年の33.1%から2016年には8.0%まで下がり、中国人の日本への「良くない、どちらかといえば良くない」が2007年

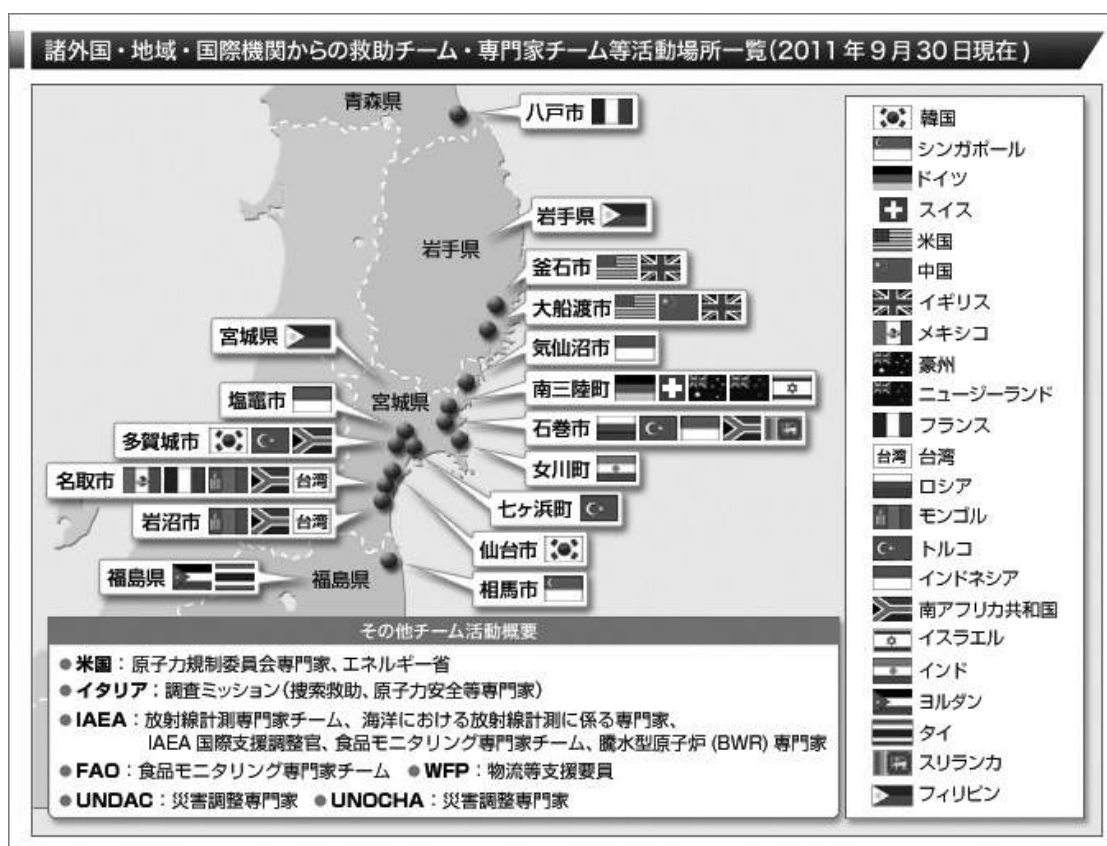


図8 東日本大震災への諸外国等の支援活動
(2011.09.30時点・外務省「わかる！国際情勢」電子版より転載)

の36.5%から2016年には76.7%に上昇、逆に「良い、どちらとえば良い」は2010年の38.3%から2016年には21.7%まで下がっている⁽³⁹⁾。

是非とも自らの眼で相手国の実態に接して欲しい。観光も国際協力の一部である、と言えば国際協力学研究者から笑われるであろうが、国際協力実践家からすれば妥当な表現である。

21世紀は国際協力の世紀である。文明が急速に発展し、各国の相互依存が日に日に濃密になった結果である。いまや世界74億人は運命共同体となった。

2011年に発生した東日本大震災では同盟国アメリカ軍の「トモダチ作戦」のみならず、多数の国と地域から緊急援助隊など多くの支援が寄せられた。義捐金も200億円以上といわれている台湾はじめほぼ全世界から寄せられた。後発開発途上国(いわゆる最貧国)のラオス・スーダン・ルワン

ダ・キリバス・エリトリア・ニジェール・ツバルなどの国々からも浄財が寄せられた。

これらの支援は、これまでの日本のODAやNGOなどをふくむ国際協力への恩返しと表明した国もあり、国民からODAなど国際協力を強化すべきとの意見も出始めた。筆者も強化を望む一人である。財政苦しい我が国であるが、資金協力ばかりでなく優秀な人材はじめ各種技術やノウハウなどで協力できる分野は多い。

丹羽宇一郎元駐中国大使は『習近平はいったい何を考えているのか—新・中国の大問題』で国際「外交」の両輪ともいえる政治交流と民間交流について次のように述べている。

国交正常化40周年の2012年、交流事業が約600件計画されたが、実施された行事は140件ほど。当初予定していた行事の四分の三がキャンセルされた。原因は、尖閣諸島をめぐる問題による関係悪化である。準備していた両国の多くの人びとが涙をのんだ。(中略)行事を反故にしたのは、日中両国の政治である。首脳たちにそのことへの反省の色が見られないことに、私は強い憤りを覚えた。日中関係は、政治家同士の交流だけで育まれてきたわけではない。友好関係を築くため、両国のさまざまな分野で何千万という人びとが努力を重ね、両国に多大な利益をもたらした。それを覆す権利は、今の日本の政治家にも中国の政治家にもない⁽⁴⁰⁾。

筆者の国際協力の舞台は中国であるが、世界各地で国際協力を続けておられる諸氏に声援と感謝を送りたい。国際協力は国家のみならず各種組織や個人でも必要な「共生・共育・循環型」活動であり、人を活かし自分も生きる道と固く信じ、今後も新疆ウイグル自治区の人々の更なる幸せへ老残微力を捧げたい。灰はタクラマカン沙漠に撒く。

キーワード：国際協力35年、中国新疆、実践10カ条

〈注〉

- (1) 小島康誉『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』(2013)、
『Kizil, Niya and Dandanoilik』(2016)などで長期にわたる活動の全容を発表している。
- (2) 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会『日中友好キジル千仏洞修復保存協賛金のお願い』(1987)、同協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」(1988)、同協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」(1989)、前掲1『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』pp. 23-42
- (3) 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』全3巻(法蔵館1996、中村印刷1999、真陽社2007)、前掲1『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』pp. 43-88、中日尼雅遺址学術調査隊「1988-97年民豊県尼雅遺址考古調査簡報」『新疆文物』(2014.3—4期)
- (4) 「中国文物報」(1996.02.18、2001.04.04)
- (5) 日本側による『ニヤ調査報告書』(日中両文)は前掲3のように3巻を刊行済みであるが、中国側編集による『ニヤ調査報告書』(中国語)は大幅に遅れている。于志勇中国側学術隊長(現新疆ウイグル自治区博物館長・前新疆文物考古研究所長)によれば2016年末頃には刊行とのことである。
- (6) NHKほか『シルクロード絹と黄金の道展』(2002)pp. 103、114-121、124-125、127、147、NHKほか『新シルクロード幻の都楼蘭から永遠の都西安へ展』(2005)pp. 59、67、69
- (7) 新疆ウイグル自治区文物局電子版「关于開展絲綢之路申遺準備工作的情况介紹」(2007.04.29)、「絲綢之路申報世界遺産国内遺産選点推荐名单及其評議意見」(2008.02.15)にはキジル千仏洞・交河故城・高昌故城・スバシ故城・楼蘭遺跡などと共にニヤ遺跡も含まれていた。
- (8) 2015年10月、筆者が変化状況観察に現地入りした際、仏塔・92B4(N2)・92B9(N3)・92B8(N4)などで保護柵工事が行われていた。
- (9) 本文記載以外は『中瑞西北科学考察档案史料』(新疆美術摄影出版社2006)、『スタイン第四次新疆探検档案史料』(新疆美術摄影出版社2007)である。
- (10) 日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査隊『日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査報告書』(真陽社2007)、同調査隊『丹丹烏里克遺址—中日共同考察研究報告』(文物出版社2009)、前掲1『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』pp. 89-122
- (11) NHKほか『新シルクロード幻の都楼蘭から永遠の都西安へ展』(2005)pp. 71-79
- (12) 2013年には日中双方は「シルクロード新疆での世界的文化遺産保護研究と国際協力国際シンポジウム・写真展」を佛教大学宗教文化ミュージアムで開催し、キ

ジル千仏洞修復保存・ニヤ遺跡調査と共にダンダンウイリク遺跡調査研究と同遺跡検出壁画保護研究などについても発表した。

法隆寺は2015年11月「金堂旧壁画の本格調査を行い、焼損70周年の2019年に中間報告の予定」と発表した。法隆寺旧壁画は「鉄線描」手法で描かれている。その源流の実物資料ともいわれている「屈鉄線」手法で描かれているダンダンウイリク遺跡壁画を2002年、我々日中共同隊が発掘した。法隆寺金堂旧壁画が注目されるほど、ダンダンウイリク遺跡壁画の重要性が高まるものと思われる。法隆寺「中間発表」に合わせて、国際シンポジウム「鉄線描と屈鉄線」を開催したいと考えている。

- (13) 「筆者と新疆大学との協議書」(1986.07.16)、「新疆日報」(1994.10.12ほか多数)、塔西甫拉提・特依拜「小島康誉先生与新疆大学“情缘”」『大愛無疆』(2011) pp. 30-34、「新疆大学電子版—新疆大学举行2016年第31次小島康誉奨学金頒獎儀式」(2016.09.21)ほか
- (14) 「新疆日報」(2003.07.11ほか)、劉曉慶ほか「愛心捐助希望小学」『大愛無疆』(2011) pp. 56-59
- (15) 「筆者と新疆文化庁との協議書」(1999.07.03)、「中国文物報」(1999.08.01)、「新疆日報」(2001.12.19ほか多数)、韓子勇「小島康誉与新疆文化」『大愛無疆』(2011) pp. 6-23、「筆者と新疆文化庁との協議書」(2016.09.21)
- (16) 「筆者とウルムチ市政府との協議書」(1999.07.01)、「ウルムチ晩報」(2000.07.16ほか多数)、胡平「勿以善小而不為」『大愛無疆』(2011) pp. 121-126、「ウルムチ市外事僑務弁公室電子版—小小善举暖人心—小島康誉丝路兒童助學金在烏魯木齊西白楊溝小学發放」(2016.09.28)
- (17) 「新疆日報」(1996.04.11ほか多数)、楊新才「慷慨予人儉朴律己」『大愛無疆』(2011) pp. 127-130、「筆者と龜茲研究院との協議書」(2016.09.16)
- (18) 「新疆日報」(1996.04.11ほか多数)、楊新才「小島之最」『大愛無疆』(2011) p. 158
- (19) 「新疆日報」(1989.08.04ほか)、「新民晩報」日本版(2010.08.06)、楊新才「小島之最」『大愛無疆』(2011) p. 151、「新疆大学国際文化交流学院簡報電子版—新疆大学国際文化交流学院举行小島氏客座教授聘儀式」(2016.09.22)
- (20) 「日本經濟新聞」(1993.07.27ほか)、「新疆日報」(2002.03.27ほか)、楊新才「小島之最」『大愛無疆』(2011) p. 156
- (21) 「新疆日報」(2007.04.28)、「京都新聞」(2007.05.10)、「読売新聞」(2007.05.10)では大学名・研究所名・個人名も報道された。発表した研究所教授は「中国の研究者が許可を取っていると思いこみ、違反にあたる測量とも考えていなかった」と述べたと報道されている。
- (22) 「奈良日日新聞」(1995.04.23)、「人民日報」日本電子版(2008.08.04)、楊新才

- 「小島之最」『大愛無疆』(2011)p. 157
- (23) 劉宇生ほか編『外国友人中国情—小島康誉与新疆』(2001)は阿不来提·阿不都熱西提新疆ウイグル自治区主席の序にはじまり、キジル千仏洞修復保存活動やニヤ遺跡調査、新疆政府顧問・北京・日本での活動などが写真とともに紹介されている。韓子勇編『大愛無疆—小島精神与新疆30年』(2011)は努尔·白克力新疆ウイグル自治区主席の序にはじまり、編者韓子勇新疆文化庁書記など新疆各方面の諸氏が筆者との国際協力活動を写真入りで紹介している。
- (24) 高木保興編『国際協力学』(2004)p. iii
- (25) 前掲(24)『国際協力学』pp. v-vii
- (26) 前掲(24)『国際協力学』p. 157
- (27) 下村恭民ほか『国際協力 その新しい潮流』(2009)p. ii
- (28) 前掲(27)『国際協力 その新しい潮流』pp. iii-ix
- (29) 前掲(27)『国際協力 その新しい潮流』p. 278
- (30) 内海成治編『国際協力論を学ぶ人のために』(2010)p. i
- (31) 前掲(30)『国際協力論を学ぶ人のために』pp. viii-xiv
- (32) 前掲(30)『国際協力論を学ぶ人のために』p. 96
- (33) 山本敏晴『国際協力をやってみませんか?』(2012)pp. 247-251
- (34) 国際開発ジャーナル社編集部『国際協力ガイド』(2014)pp. 179-187
- (35) 前掲(21)「京都新聞」、「読売新聞」
- (36) 「新疆日報」(2007.04.28)には「我区再次查处日本公民非法测绘案」(我が自治区は再度、日本人の非法測量調査事案を捜査した)と題して、「2007年4月24日、新疆ウイグル自治区測絵局は日本人4名(記事では実名報道)が艾比湖地区でおこなった非法測量を停止させ測量器具や資料を没収し、罰金刑を与えた。これは2006年4月10日、日本の研究所所員が和田で実施した非法測量に続く事案である」と言外に対日関係をからめて報道している。記事は「事件後自治区顧問の小島康誉氏が日本側代表者(記事では実名報道)を伴い新疆を訪問した。日本側代表者は反省と遺憾の意を表明した。自治区測絵局長はこのようなことは中日科学技術協力に不利であり、類似事件が再び起きないように希望した。日本側へ関係法規集を贈るとともに、小島氏へ感謝を表明した」と続いている。日中双方からの依頼を受けて遺憾表明を仲介したものである。
- (37) 人民网日本語版から引用したとある Record China 電子版(2016.09.21)に「1986年、小島氏は初めて10万元の資金募金を行い、亀茲の石窟保護に役立てて欲しいと新疆へ贈った。その後30年あまり、小島氏は相前後して新疆に1億500万円を寄付し、そのお金はキジル千仏洞の保護修復およびニヤ遺跡・ダندانウイリク遺跡の考古発掘に運用された」と報じられているが10万元は募金でなく個人寄付であり、1億500万円は本文記載のように諸氏の浄財であり、全額がキジル千仏

洞修復保存に使用され、ニヤ・ダンドンウイリク両遺跡の総合調査費用数億円は一部に文部科学省助成と佛教大学支援金を含むものの殆どは筆者の個人拠出である。また人材育成事業や相互理解促進事業での億を超える費用も一部は友人からの協力を得ているが殆どは個人拠出である。

- (38) キジル千仏洞保存の重要性などを特集した「天山を往く～氷河の恵みシルクロード物語～」は2016年2月にBSフジで放映された。授与式を報じた「新疆网」(2016.09.22)には「小島康誉背着满是补丁的包再次来乌」(小島は補修した頭陀袋を背負って新疆を再度訪問した)と題して、「新疆芸術劇場の多力坤・再帕尔ら20人と伊犁哈萨克自治州文物局など4組織へ贈呈した。(5年で)140万人民元提供を調印した」などと記されている。具体的成果をあげた第一線の諸氏中心に選出している。授与式席上、新疆文化庁の穆合塔尔・買合蘇提庁長が本賞の意義を強調し「諸君、小島さんのこの頭陀袋を見よ。ポロポロだ。それだけ節約して皆さんに奨励金を出している。もっとも若者がジーンズをわざと破いてはいるから74歳の彼も若者だ。これをプレゼントする」と挨拶し、ウイグル模様の手提げ袋をいただいた。一同から歓声があがった。
- (39) 人民中国編集委員会『人民中国』(2016.11)p. 23
- (40) 丹羽宇一郎『習近平はいったい何を考えているのか—新・中国の大問題』(2016)pp. 272-273

〈参考文献〉

- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会『日中友好キジル千仏洞修復保存協賛金のお願い』1987
- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金中間報告」1988
- 日中友好キジル千仏洞修復保存協力会「キジル千仏洞修復保存募金最終報告」1989
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第一巻)法蔵館1996
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第二巻)中村印刷1999
- 劉宇生ほか編『外国友人中国情—小島康誉与新疆』新疆人民出版社2001
- NHKほか『シルクロード絹と黄金の道展』NHKほか2002
- 高木保興編『国際協力学』東京大学出版会2004
- NHKほか『新シルクロード幻の都楼蘭から永遠の都西安へ展』NHKほか2005
- 日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』(第三巻)真陽社2007
- 日中共同ダンドンウイリク遺跡学術調査隊『日中共同ダンドンウイリク遺跡学術調査報告書』真陽社2007

- 日中共同ダンドンウイリク遺跡調査隊『丹丹烏里克遺址—中日共同考察研究報告』
文物出版社2009
- 田中治彦『国際協力と開発教育 援助の近未来を探る』明石書店2008
- 下村恭民ほか『国際協力 その新しい潮流』有斐閣2009
- 内海成治編『国際協力論を学ぶ人のために』世界思想社2010
- 韓子勇編『大愛無疆』新疆美術摄影出版社2011
- 山本敏晴『国際協力をやってみませんか?』小学館2012
- 小島康誉『新疆での世界的文化遺産保護研究事業と国際協力の意義』佛教大学宗教
文化ミュージアム2013
- 牧田東一編『国際協力のレッスン 地球市民の国際協力論入門』学陽書房2013
- 佛教大学宗教文化ミュージアム・佛教大学内ニヤ遺跡学術研究機構・新疆文物考古
研究所「シルクロード新疆での世界的文化遺産保護研究と国際協力国際シンポジ
ウム発表要旨・写真パネル展図録」2013
- 国際開発ジャーナル社編集部『国際協力ガイド』国際開発ジャーナル社2014
- 朽木昭文ほか『アジアの開発と地域統合 新しい国際協力を求めて』日本評論社
2015
- 国際開発ジャーナル社中坪央暁編『国際協力キャリアガイド』国際開発ジャーナル
社2015
- 丹羽宇一郎『習近平はいったい何を考えているのか—新・中国の大問題』PHP 研
究所2016
- 人民中国編集委員会『人民中国』人民中国雑誌社2016
- 小島康誉編『Kizil, Niya and Dandanoilik』東方出版2016